

近江楽座

まち・むら・くらしふれあい工舎

滋賀県立大学 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代G P)

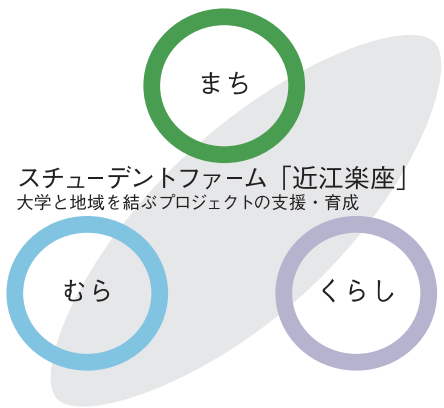
www.ses.usp.ac.jp/ohmirakuza

STUDENT FARM

地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。

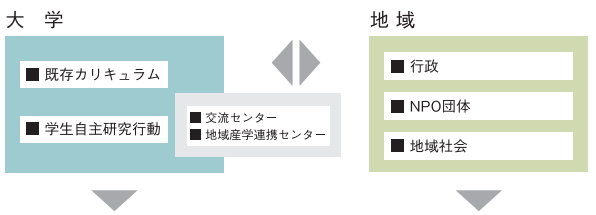
学生主体の地域プロジェクトをサポートします。

"スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎"は、学生主体の地域プロジェクトを学内公募し、選定します。選定されたプロジェクトに対しては、調査活動費の助成、専門家のアドバイスなど、さまざまな支援が受けられます。

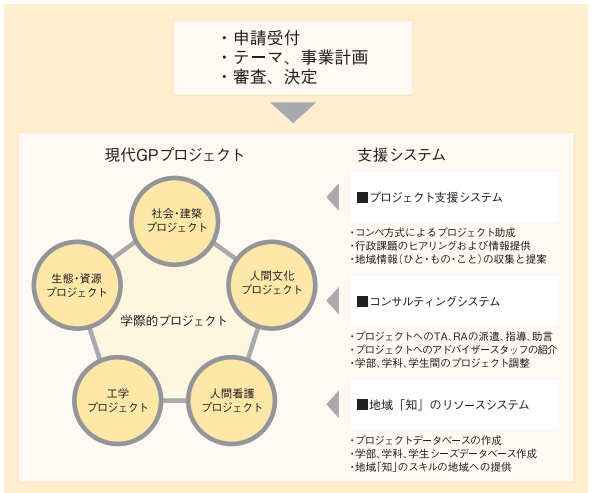


現代G Pで大学と地域の連携を深めます。

"スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎"は、各学部地域を対象とする演習、フィールドワーク等カリキュラムの課題及び教員、学生による自主研究活動から、「地域活性化」に寄与する成果が期待できるプロジェクトを選定し、サポートします。



スチューデントファーム「近江楽座」 / まち・むら・くらしふれあい工舎

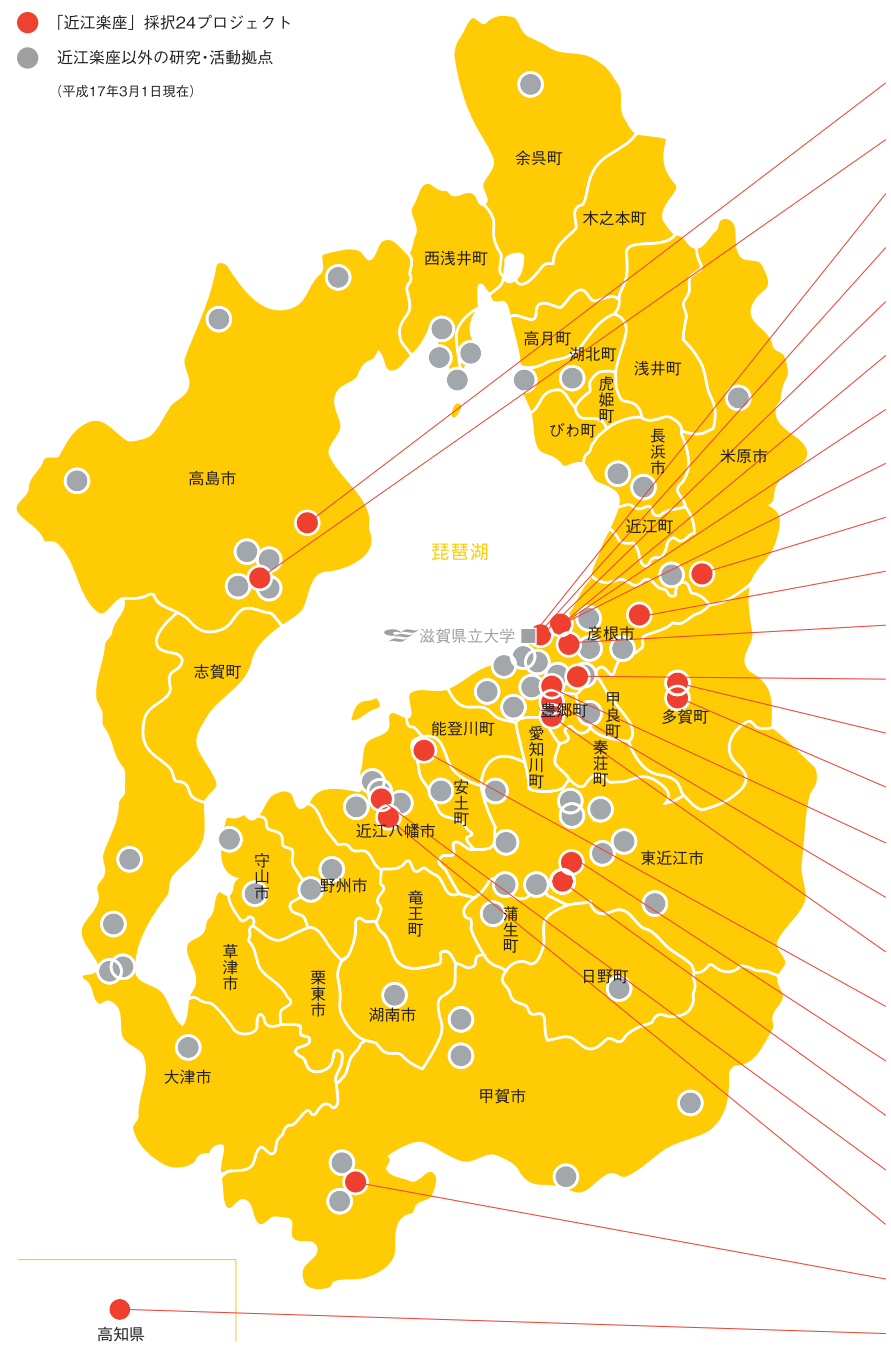


現代G Pとは

現代G Pは、平成16年度に文部科学省が創設した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の略称です。現代的教育ニーズとして示された6テーマ、(1)地域活性化への貢献 (2)知的財産関連教育の推進 (3)仕事で英語が使える日本人の育成 (4)他大学との統合・連携による教育機能の強化 (5)人材交流による産学連携教育 (6)ITを活用した実践的遠隔教育(e-Learning)に対して、各大学等がテーマを選択した上で、独自の取り組みプログラムを申請する仕組みです。平成16年度は、全国で559件の申請があり、86件が採択されました。滋賀県立大学は、開学以来の地域との係わりを重視してきた教育実績をもとに、「地域活性化への貢献」をテーマとして選び、採択されました。

湖国滋賀の歴史、文化、自然が、私たちのフィールドです。

滋賀県立大学は、湖国滋賀をフィールドとして、湖南、湖東、湖西、湖北の各地域で活動を展開してきました。"スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎"は、学生たちの主体性や行動力を評価し、プロジェクトを支援します。現代G Pへの取り組みから、大学と地域の新たな連携の構図がみえてきます。



近江楽座

まち・むら・くらしふれあい工舎

採択24プロジェクト

- リバーウォッチング in 安曇川
- 発信基地 in 高島郡
- 初めての農家 一畝の現場で学ぶ学生プロジェクト
- 竹林プロジェクト
- 市民および産学に関わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護
- 「土戸のある町家」の保存と活用
- Q+
- 下着関連新製品開発デザイン事業
- 上丹生地区アイデンティティ計画
- 農村「男鬼」の村おこし
- 伝統創作仏壇デザイン開発事業
- 造形活動拠点の形成と展開プロジェクト
- 中山道コンシェルジュ養成プロジェクト
- Taga-Town-Project
- 社会資本としての集住体プロジェクト
- 三津・瀬湖町土地利用計画
- とよさと快蔵プロジェクト
- Nio Project (内湖に調和した環境提案)
- 隣室児・産自立支援・共生社会づくりプロジェクト
- わっしょい湖東
- 「藪戸のある家」の保存と活用
- BIWAKOヒンケール実行委員会
- マニフェスト発表
- 吾川村下名地区地域活性化事業

地域と大学を考えるシンポジウム

公開プレゼンテーション

- ・Taga-Town-Project(TTP)
 - ・Q+
 - ・農村「男鬼」の村おこし
 - ・中山道コンシェルジュ養成プロジェクト
 - ・造形活動拠点の形成と展開プロジェクト
- 2004/11/12 (fri) 13:00-16:30
滋賀県立大学 A4-205教室

- ・上丹生地域アイデンティティ計画
 - ・とよさと快蔵プロジェクト
 - ・竹林プロジェクト
 - ・Nio Project (内湖に調和した環境提案)
 - ・発信基地 in 高島
- 2004/12/15 (wed) 13:00-17:30
滋賀県立大学 A4視聴覚教室

- ・市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護塾
 - ・伝統創作仏壇デザイン開発事業
 - ・吾川村下名地区地域活性化事業
 - ・社会資本としての集住体プロジェクト
 - ・「藪戸のある家」の保存と活用
- 2005/1/14 (fri) 13:00-17:00
滋賀県立大学 交流センター研修室
- 総合司会：奥貴 隆 滋賀県立大学環境科学部教授/プロジェクト推進会議リーダー

パネルディスカッション

「地域と大学を考えるⅠ -地域活性化とは-」

大学が地域に入っていくとはいかなる意味を持つのでしょうか。地域からの期待、そして学生からの期待、教員からの期待などを交えながら、地域活性化の本質について議論していきます。

印南 比呂志	滋賀県立大学人間文化学部助教授
上田 洋平	滋賀県立大学大学院人間文化研究科D4
中川 雄輔	滋賀県立大学大学院環境科学研究所M1
山田 実	葉の花プロジェクトネットワーク
青山 薫子	大津の町家を考える会/坂本あるき隊
近藤 隆二郎 / 進行	滋賀県立大学環境科学部助教授

「地域と大学を考えるⅡ -地域課題への取り組み-」

地域にはさまざまな課題があります。その課題についてどのように発見し、そして取り組んでいくのか。大学が地域とつながることによる可能性と期待、そして問題点などについて議論していきます。

高橋 卓也	滋賀県立大学環境科学部講師
初宿 文彦	滋賀県県民文化生生活部県民文化課NPO活動促進室
菅谷 多美子	環境を考える会理事長
金尾 慈史	滋賀県立大学大学院環境動態学専攻D1
村上 修一 / 進行	滋賀県立大学環境科学部助教授

「地域と大学を考えるⅢ -地域へ根付くとは-」

時間が限られている学生という主体と、永遠の時間を持つ地域が出会ったとき、その出会いをどのように受けとめ、その胎動をいかに根付かせていくのか。教員の果たす役割とは何か。大学が地域に根付くことができるのかというテーマをふまえ、抱える問題点や展望などについて議論していきます。

木村 泰造	木村水産株式会社社長 / 彦根観光協会副会長
吉田 豊	文泉堂 / 長浜商店街連盟会長
浅井 薫	京エコロジーセンター事務局 / 人間文化学部OB
黒田 勇	滋賀県立大学人間文化学部教授
山田 実	環境学び舎のたね事務局 / 環境科学部OB
近藤 隆二郎 / 進行	滋賀県立大学環境科学部助教授

事業提案型の大学活動 地域は速度・学生の速度・大学の速度 自分を客観視すべき サークル活動にお金を出すのが近江楽座ではない 限界に対する自覚が足りない フィールドワーク体験の成果を理論化・結晶化しては地域がバトロンになるような制度 24プロジェクトの多岐の蓄積・日頃の蓄積の先には事業化が必要 地域が学生を甘やかさないでほしい 事業化だけが地域貢献の仕方ではない 民でも公でもできない隙間があるはず 日常生活の価値がわかればそれも事業化 地域から見ると毎年毎年違う人と対応しなければならない 地域の人は死ぬまでそこにいる 教員としての立場から何が長期的か 学生は信頼し信用しが信用してない 動くということ 縦割りでも横割りでもなく斜めの関係を進めたい 地域の方が会話と共に協力してくれるような活動をしている 非常に時間の流れの感覚が遅い 大学シンクタンク 交流センターにインキュベーター機能が必要 すべて役割はともて大切 大学の広報機能が重要 組織としての大学と研究者としての教員 学生と分けて考えるということはきわめて大事だと思う 大学ができることはいっぱいある 一部の教員やNPO 学生などがまったく対等な形でできるような地域活動委員会などを組織してできないだろうか 小さな成功体験の事例をたくさん作ることで 大学もまた量があると思う マイナスの面もある その地域で自分らがやっていることをちゃんと知ってもらう手段を考えなければならない 結果なり提案なりを明確なカタチで還元すること 失敗できるのは学生のうちだけ いろいろなかところでチャレンジしてほしい 自分のアンテナの感度をあげること 学生と接したいが、入り口はわからない わかりやすいシステムをつくってほしい 学生にとって普通に生きることが難しい 大学に来てから、生活の多様さや重みに驚くのだろう ボランティアの際の危機管理 現在は自由にやれているが現代G P後も継続できる予算措置をつくっていく必要がある 大学院生→卒業する予定→どうなるかわからない、という不安 キーマンが卒業したらその活動が継続できなくなることも 同じ想いを持つ人をどう育てるかが課題 学生と関わる際にはその覚悟が必要 きつ々滋賀県立大学と交流センター必要とされれば継続は自ずから成る むしろ大学からの調査が多い 滋賀県立大学現代G Pプロジェクト推進会議 してくるという感情 イベントを運動という感覚で1回きりで失敗としない tel:0749-29-8292 fax:0749-29-8473 http://www.ses.usp.ac.jp/ohmirakuza e-mail: s234737@pref.shiga.jp 制作:近江楽座リーフレット制作チーム 制作:近江楽座リーフレット制作チーム

